

学習成果の自己評価〔保育学科〕

保育学科では、学生の学習成果を量的・質的データとして測定する仕組みとして、直接評価（定量的指標）となる GPA 分布、単位修得率、資格取得率、退学・留年率、学位取得率、就職率、学習時間、教育・保育実習評価を実施している（備付-17）。また、間接評価（定性的指標）として、「保育学科学生アンケート」（1年生）、「学生アンケート」（1・2年生）、「卒業生アンケート」、学生による授業評価、雇用者へのアンケート調査等がある。

「保育学科学生アンケート」（1年生）、「学生アンケート」（1・2年生）、「卒業生アンケート」では、学生による自己評価を2年間の学習成果として測定している。平成22年度に保育専攻では、「保育・教職実践演習（幼稚園）」の科目が新設され、「学習成果の自己評価」により、学生による自己評価を半期ごとに実施することとした。また、令和元年度から「学習成果の自己評価」の結果を一人一人に配布し、学習成果の獲得状況をフィードバックしている。さらに、平成30年度から学生自身による学習の達成状況を点検・改善するツールとして、ポートフォリオと一部実習科目においてルーブリック評価の導入を実施した。保育学科の教育目的・目標の達成に向けて、学生の学習の履歴と学習成果の蓄積などの情報を活用するポートフォリオや、評価する側と評価される側の認識が共有されるルーブリック評価を活用することで、学生・教員双方が学習成果の獲得状況を測定できるよう努めている。

保育学科では「学習成果の自己評価」を平成23年度から改善を重ねて実施してきた。令和5（2023）年度卒業生は、実習を経験する前のⅠ期：1年生の8月、Ⅱ期：1年生の2月、Ⅲ期：本実習を全て終えた2年生の9月（幼稚園・保育所実習Ⅰ・保育所実習Ⅱ・施設実習が概ね終了後）、Ⅳ期：就職活動を経験し保育実践研究を作成し終えた2月に、「学習成果の自己評価」を実施した。保育者に必要な資質能力についての自己評価で、＜人間性＞＜他者との協力＞＜コミュニケーション＞＜幼児教育についての理解＞＜保育についての理解＞＜子どもについての理解＞＜基礎知識・技能＞＜保育実践＞＜課題探求＞の9領域について4段階で評価している。

4：十分に理解（習得）できた 3：おおむね理解（習得）できた
2：理解（習得）に努力を要する 1：一層努力を要する

教育課程半期終了ごと自分自身の状況进行评估し、到達度を省察した結果は下記のとおりである。

次の表には2022（令和4）年度入学生における「学習成果の自己評価」のⅠ期とⅣ期の結果の比較を示した。Ⅰ期とⅣ期の平均評定値の比較では、9領域のほぼ全ての項目において上昇している結果が示され、＜幼児教育についての理解＞、＜保育についての理解＞、＜子どもについての理解＞、＜教科・教育課程に関する基礎知識・技能＞、＜保育実践＞、＜課題研究＞の7領域では、全ての項目において有意な差（上昇）が見られた。Ⅰ期と比較してⅣ期の平均得点が低い項目も見られた（＜他者との協力＞の領域における「他者意見の受容」、「保護者・地域との連携協力」、「他者との連携・協力」）が、いずれの項目も、統計的に有意な差ではなかった。

表 I 期（1年次8月）とIV期（2年次2月）の比較

領域	項目	I 期 (1年次8月)	I 期 (1年次8月)	IV期 (2年次2月)	IV期 (2年次2月)	IV - I	t
		M	SD	M	SD		
人間性	自分の性格に関する自己理解	3.05	0.69	3.28	0.72	0.23	2.11 *
	自分の行動特徴に関する自己理解	2.89	0.73	3.14	0.68	0.25	2.24 *
	向上心	2.94	0.77	2.95	0.82	0.01	0.07
他者との協力	表現力	2.61	0.87	3.04	0.83	0.42	3.17 **
	他者意見の受容	3.33	0.66	3.19	0.67	-0.14	1.35
	保護者・地域との連携協力	3.33	0.61	3.29	0.79	-0.03	0.28
	共同保育の実践実施	3.10	0.86	3.22	0.68	0.13	1.02
	他者との連携・協力	3.43	0.80	3.30	0.69	-0.13	1.10
	役割遂行	3.02	0.84	3.26	0.64	0.24	2.00 *
コミュニケーション	発達段階に対応したコミュニケーション	2.69	0.82	3.05	0.72	0.36	2.98 **
	子どもに対する態度	3.31	0.79	3.47	0.66	0.16	1.44
	公平・受容的態度	3.14	0.73	3.31	0.67	0.16	1.45
	社会人としての基本	2.99	0.67	3.15	0.70	0.17	1.54
幼児教育についての理解	教職の意義	2.80	0.71	3.17	0.75	0.37	3.23 **
	教育の理念・教育史・思想の理解	2.16	0.72	2.86	0.81	0.70	5.74 ***
	学校教育の社会的・制度的・経営的理解	2.26	0.72	2.88	0.71	0.63	5.50 ***
保育についての理解	保育の意義	2.90	0.67	3.21	0.57	0.30	3.07 **
	保育の理念・保育史・思想の理解	2.34	0.72	2.92	0.76	0.58	4.94 ***
	保育の社会的・制度的・経営的理解	2.30	0.68	2.86	0.74	0.55	4.91 ***
子どもについての理解	心理・発達論的な乳幼児の理解	2.61	0.73	3.08	0.70	0.47	4.17 ***
	クラス集団の形成	2.63	0.68	3.08	0.68	0.45	4.20 ***
	子どもの状況に応じた対応	2.48	0.81	2.97	0.76	0.50	4.01 ***
教科・教育課程に関する基礎知識・技能	保育内容5領域	2.87	0.72	3.16	0.73	0.29	2.51 *
	幼稚園教育要領・保育所保育指針	2.57	0.81	3.08	0.76	0.51	4.10 ***
	教育課程・保育課程の構成に関する基礎理論・知識	2.41	0.68	2.94	0.75	0.53	4.65 ***
	情報機器の活用	2.61	0.73	2.96	0.68	0.35	3.14 **
	保育の指導法	2.43	0.63	3.00	0.67	0.57	5.57 ***
保育実践	保育構想力	2.30	0.84	3.03	0.76	0.73	5.70 ***
	教材開発力	2.29	0.90	3.01	0.79	0.72	5.40 ***
	保育展開力	2.87	0.90	3.31	0.61	0.44	3.67 ***
	表現技術	2.71	0.90	3.16	0.67	0.45	3.59 ***
課題研究	課題認識と探究心	2.93	0.71	3.16	0.67	0.23	2.08 *
	教育・保育時事問題	2.79	0.84	3.04	0.78	0.25	1.98 *

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

これらのことから、学生の自己評価として、2年間の学習を通して一定程度以上の成果を獲得していることが示されたと言える。昨年度の卒業生（2021年度入学生）は、2019年度末からの新型コロナウイルス感染症の流行の影響により、様々な“制限”が緩和されることが期待されながらも、結果的には卒業まで“コロナ禍”が続いたことにより、授業等で得た知識を活用する場としての実践経験を重ねていくことが難しく、その後IV期までの得点の伸びにつながりにくかった学年であったが、2022年度入学生は、2年次の5月より新型コロナウイルス感染症の第5類移行とともに、様々な制限が緩和され、実習や行事等も概ね“コロナ禍”前と同等の実施をすることができた学年であった。その結果、授業で得た知識・技術を、様々な実践の場と結びつけることができるようになり、自身が学んでいる・成長している実感を得やすくなった結果、I期と比較してIV期の自己評価の平均評定値が高くなったと考えられる。

一方で、IV期の全領域の平均評定値は3.11であり、3点（おおむね理解できた）を超えているものの、2021年度入学生（3.14）2020年度入学生（3.24）と比較すると低い値となった。2022年度入学生のI期における全領域の平均評定値は2.76であり、2021年度入学生（3.14）、2020年度入学生（2.91）と比較して低い値となっている。その理由としては、例年と比較して“自己評価が低い”学生が多い学年だった可能性も考えられるが、本学の「入学者の変化」の影響が反映されている可能性がある。18歳人口の減少および近年、保育の分野を希望する高校生も減少傾向にある中で、本学の2022年度入学生は定員を大きく

下回ることとなり、その結果、入学希望者が定員を超えていた時期と比較すると、意欲・学力面をはじめ多様な学生が入学した年であったと考えられる（実際に、実習や単位取得が困難であった学生や、資格取得・進路選択も様々な配慮や支援が必要な学生が多い学年でもあった）。その傾向は、今回の「学習成果の自己評価」における各項目の標準偏差の変化にも表れている。昨年度（2021年度入学生）までは、各項目における標準偏差はおおむね0.4～0.6であったが、今年度（2022年度入学生）の各項目における標準偏差は0.6～0.8と、ばらつきが例年よりも大きい結果となった。さらに、例年高い値を示す「向上心」の平均評定値が3.00を下回っている結果は、周囲と“比較”して自信を失ってしまったり、授業の内容についていくことが難しく意欲や目標を持ち続けることが難しくなってしまう学生が一定数いたことを反映したものであると考えられる。

しかし、先述のように、全体としての平均値はやや低い傾向にあっても、Ⅰ期と比較してⅣ期の値が大きく伸びていることは、本学科教員の「ダブル担任制」をはじめとした「個別に関わり援助する姿勢と力」が一定の成果を上げた結果であると言える。以上のことから、短期大学や本学を取り巻く様々な変化の影響は受けながらも、また、個別のニーズによりきめ細やかに対応していく必要性が示されながらも、2022年度入学生については、全ての領域およびほぼすべての項目について、各々の状況に応じた学習成果の獲得が、2年の間で一定の水準まで行われたと言えるだろう。

Ⅰ期からⅣ期の変化の詳細について、次の表には各期における平均評定値を示した。Ⅰ期からⅣ期の平均評定値は概ね上昇していく傾向は同じであるが、推移の傾向は大きく4つのタイプに分類された。4つのタイプそれぞれにおける4時点の平均評定値の変化過程はタイプにより異なっており、それぞれの時期の継時的変化の特徴ごとにタイプとして、図にまとめた。

表 平均評定値の時期変化

		I 期	II 期	III 期	IV 期	タイプ
		1年次 8月	1年次 2月	2年次 9月	2年次 2月	
人間性	M	2.96	2.81	2.97	3.12	3
	SD	0.55	0.64	0.64	0.62	
他者との協力	M	3.13	2.99	3.11	3.20	3
	SD	0.56	0.57	0.56	0.62	
コミュニケーション	M	3.03	3.07	3.28	3.25	4
	SD	0.59	0.56	0.59	0.59	
幼児教育についての理解	M	2.38	2.66	2.78	2.92	1
	SD	0.64	0.65	0.70	0.73	
保育についての理解	M	2.50	2.63	2.76	3.00	2
	SD	0.60	0.70	0.65	0.62	
子どもについての理解	M	2.56	2.61	2.81	3.04	2
	SD	0.61	0.67	0.66	0.64	
教科・教育課程に関する基礎知識・技能	M	2.55	2.65	2.74	3.03	2
	SD	0.63	0.68	0.67	0.64	
保育実践	M	2.49	2.70	3.03	3.13	1
	SD	0.76	0.70	0.61	0.62	
課題研究	M	2.84	2.74	2.98	3.08	3
	SD	0.71	0.67	0.67	0.70	

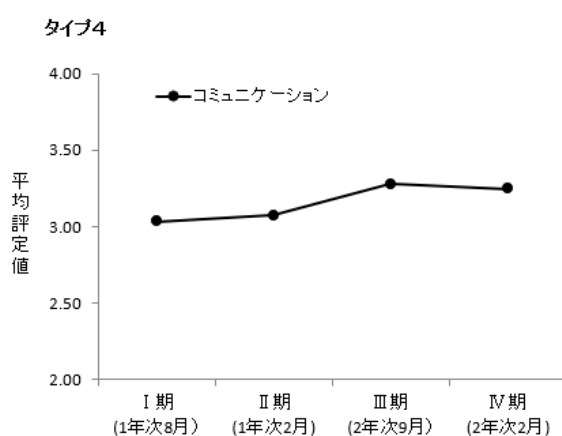
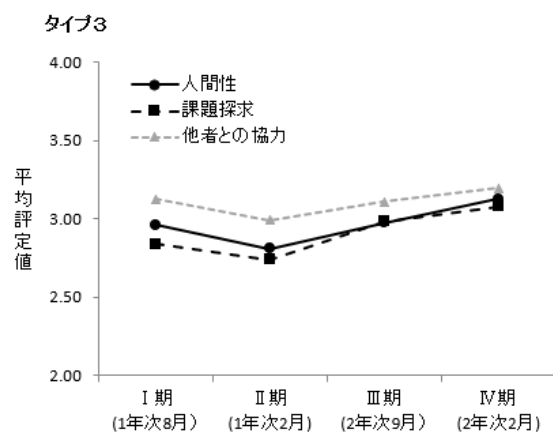
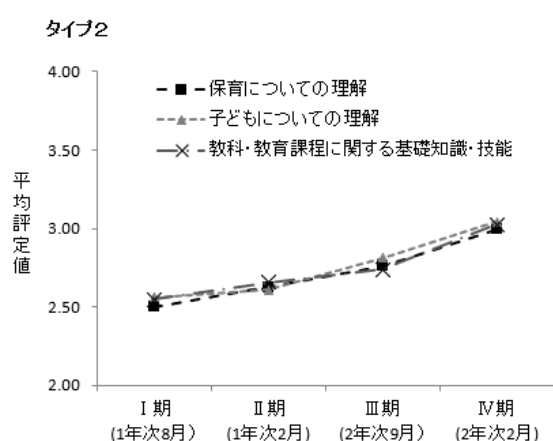
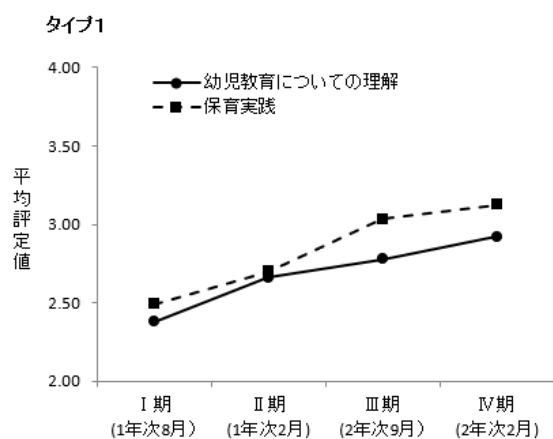


図 学習成果の自己評価の特徴的な変化

それぞれの特徴として、平均評定値の4時点の変化が、Ⅰ期からⅣ期を通して増加し、特に前半（Ⅰ期からⅡ期またはⅢ期）に大きく増加する領域（タイプ1）、後半（Ⅲ期からⅣ期）にかけて比較的大きく増加する領域（タイプ2）、Ⅰ期からⅣ期を通して比較的平坦または若干の増加があり、Ⅰ期からⅡ期にかけて一度減少しその後Ⅱ期からⅣ期にかけて増加する領域（タイプ3）と、Ⅱ期からⅢ期に比較的大きな増加を示した領域（タイプ4）の大きく4つのタイプに分かれた。

まず、Ⅰ期からⅣ期を通して増加傾向を示したタイプ1、タイプ2について述べる。タイプ1は＜幼児教育についての理解＞および＜保育実践＞の領域、タイプ2は＜保育についての理解＞＜子どもについての理解＞＜教科・教育課程に関する基礎知識・技能＞であった。「理解」に関しては、各時期で履修する科目の内容等によって、学生の実感としての学びの時期が異なっていると推察されるが、1年次の授業から幼児教育や教科・教育課程といった基礎的知識について学び、5領域の理解の深まりとともに、また、様々な実践の場を通して、保育そのものについて探求し学び理解しようとした学習の取り組みの成果が示された結果であると推察される。「知識・技術」（保育実践を含む）についても、“コロナ禍”における様々な“制限”の緩和とともに、特に2年次においては実習および行事や授業等を通した多様な実践の場の経験を通して、「理解」の深まりも合わせて、様々な知識・技術が統合された結果が示されたと言える。

次に、Ⅰ期からⅣ期を通して比較的平坦または若干の増加を示したタイプ3、タイプ4について述べる。タイプ3は＜人間性＞＜他者との協力＞＜課題探求＞の領域、タイプ4は＜コミュニケーション＞の領域であった。Ⅰ期からⅡ期にかけて減少を示した＜人間性＞および＜課題探求＞の領域については、本学入学後の様々な経験や学びの中で、改めて自分と深く向き合う機会が増えたこと（人間性）、保育・幼児教育についての知識・理解の深まりとともに探求すべき課題についての認識や選択も広がり深まった（課題探求）ことにより、一時的に評定値が下がった可能性が考えられる。また、＜他者との協力＞および＜コミュニケーション＞について、Ⅰ期からⅡ期にかけて減少または大きく変化しない結果を示した要因としては、入学前からの“コロナ禍”の影響が考えられる。2022年度入学生は、高校2,3年の次期を、様々な“制限”とともに過ごしてきた学年であり、高校の在学時から協働やコミュニケーションの機会が極端に少なかった学年である。入学後、徐々に“制限”が緩和され、授業におけるグループワークや行事を経験しながら、Ⅰ期では、協力・コミュニケーションのやりがい・楽しさを感じた一方で、Ⅱ期では学年をまたいだゼミでの活動も増えてくる中で協働の難しさを感じ、また、Ⅱ期は新型コロナウイルス感染症の“第7波”の時期であり、学内においても断続的に感染者が出たことによる若干の活動の自粛や欠席者数の増加により、教職員の業務も含めた学習環境を整え辛い時期でもあり、期待された増加が見られなかった可能性が考えられる。

各領域における平均得点の結果及び分析の結果から、2年間の学校生活において、学習成果は単純な直線増加的により生じるものではなく、時期や環境により獲得される経験の種類によって、また、その時の学習内容や学習方法、経験する学びによっても領域における学習成果は変化することが改めて明確に示されたと言える。一時的な評定値の減少も、自身の成長により理解できる事柄が増えることで新たな課題に気づき、成果の到達目標が変化することでより高められるとも言えるであろう。

また、学生の自己評価の変容を客観的に捉えるために、項目の見直しや測定方法等に関する検討も継続的な課題となる。

様々な学生の学びを保障する取り組みは、今後一層求められるものであり、本学においても、カリキュラムや授業内容等について、検討・再考する時期に差し掛かっていると言えるだろう。